

フィールドワーク 心得帖

第17回 寶劔久俊

あなたにすべてを委ねる勇気を

月日の経つのは早いもので、筆者が研究者の端くれとして中国の農村調査に携わってからの一〇年以上の年月が過ぎてしまった。中国農村のフィールドワークと言えば、改革開放後はもとより、戦前の時代から日本人や中国人の優れた研究者によって数多く行われてきた。そのため、筆者のような若輩者が中国の農村調査を総括することは、あまりに烏滸がましい。

しかしながら、現代中国の農村問題に對峙している自分自身の経験から、同じような問題意識をもつ研究者に対して、何らかのヒントを提供することはできるかもしれない。そこで本稿では、現地調査を通じて体得したことについて、具体的な事例を交えながら叙述していきたい。

●農村調査の厳しさと奥深さ

中国は広大な国土と多様な風土を抱える大国で、その様相は地域によって大きく異なる。この事実はすべての人にとって、あまりに自明なことであらう。しかしながら、中国で実地調査

をしているとき、とかくその事実を忘れてしまい、調査対象地域が中国すべてを代表しているかのような錯覚に陥ってしまいがちだ。この陥穽は、いずれの地域を研究する人でも直面するものであるが、とりわけ中国のような大国であればあるほど、そのことを常に認識することが大切と思われる。

さて、アジア経済研究所への入所後、最初のうちは先輩研究者や知り合いの先生の調査に同行させてもらう形で現地調査を行い、その後は様々な人間関係に助けられながら、農村調査を重ねてきた。その経験から学んだ教訓は、「地元の研究者や政府関係者と長期間にわたる良好な関係を構築することが、中国を理解するための重要な手段である」ということだ。

良好な人間関係を構築するためには、謙虚で誠実な姿勢を保つことで相互理解を深め、調査研究を超えた人間としての信頼関係を築いていくことが求められる。そして、時にはこちらから情報提供を行ったり、日本で

の実地調査を計画したりすることとも必要となる。

また、人間関係を構築する最も重要な場のひとつである宴会では、その振る舞いがその後の調査を大きく左右すると言っても良いであらう。中国の宴席では、地元の名物料理を始めとした豪華な食事に加え、「白酒」と呼ばれるアルコール度数は五〇度を超える蒸留酒が提供される。この「白酒」をめぐる「乾杯」合戦（一気呑みでグラスを空ける）を如何にうまくこなしていくかが、地元の人との人間関係を築くために極めて重要である。

よく、「お酒をいっぱい飲めれば大丈夫」といった意見も聞くが、私は必ずしもそうは思わない。むしろ「面子」を重んじる中国人に対して、乾杯の順番やそのタイミングを推し量ったり、自分の限界までお酒を呑む姿勢を示すことがより大切で、ただ単に飲めるだけの人は、むしろ嫌われてしまうことも多い。

さらに、相手の話に合わせながら相づちを打ち、話をうまく

展開する能力も必要とされる。私自身、大勢の中国人を相手に、持論を展開できるほどの中国語のレベルにはないため、酔っぱらって意識を失いそうになりにながらも、話の方向性を把握できるよう意識を集中させ、話の展開に合わせながら会話を進めるよう苦心している。

●江蘇省の農村調査からの啓示

ところで、筆者は二〇〇四～〇六年にかけて、アジア経済研究所の在外研究員として北京大学中国経済研究センターに在籍し、大学院のコースを聴講する傍ら、中国各地で農村調査を実施した。とくに二〇〇五年の夏には、山東省・雲南省・江蘇省・四川省・吉林省・黒龍江省というルートで、一カ月半にわたる調査旅行をしたことは、いま振り返ってみると貴重な経験となっている。そのなかでも、南京農業大学の教員と一緒に実施した江蘇省での農家調査は、私の研究人生にとって大きな転機となった。

この調査は、農村部の主要な金融機関である農村信用社の改革が、農民の借入行動に対して、どのような変化をもたらしたのか実証することを目的としてい

専門：開発経済学 中国農村経済論

編著：池上彰英・實劔久俊編『中国農村改革と農業産業化』（アジア研選書No.18）2009年、などがある。



農家へのアンケート調査の様子(江蘇省にて)

た。二〇〇五年八月に南京農業大学の四名の教員と一二名の大学院生とともに、江蘇省の泗洪県、興化市、常熟市という三つの地域を訪問し、地元政府関係者の協力のもと、農家へのアンケート調査と地元政府や農村信用社へのヒアリングを実施した。

本調査は当初、南京農業大学の教員と私の研究目的が合致して企画されたもので、調査経費の大部分をこちらで負担する予定で準備を進めていた。しかし、金融学を専門とする同大学の別の教員が、江蘇省内の農村信用社関連で強力なネットワークを

持つことから、彼に協力を仰ぐこととなった。その一方で、アンケート調査に関する経験が不足していた筆者は、調査開始当初、予算の割り振りや調査日程の調整について、細かい要望を出していた。

しかし、筆者のそのような態度を見兼ねた共同研究者から言われた一言を今でも忘れることができない。「相手を信頼しなれば、細かいことを言わず、その人にすべてを任せろ」と。

中国にも「入郷随俗」(郷に入るとは郷に従え)という言葉があるように、地元で調査を行う際大きな枠組みについては相談をするが、それ以外の具体的で細かい点に関しては、地元の人に託すことが望ましい。訪問先や調査日程の詳細までこちら側で計画したり、指定したりしてしまうと、むしろ先方の調整が困難となり、計画自体が頓挫してしまうこともある。

したがって、中国の農村調査では、人間関係を最大限に活用し、先方の可能な範囲でこちらの希望に見合うように調整してもらうことが、結果としてより良い調査につながる。実際、

江蘇省調査でも、先方との調整をその先生にすべて任せた結果、現地との調整は非常にスムーズとなり、マイクロバスや食事、宿泊の手配といったロジ調整の手間は大幅に減り、実際に掛かった調査費用も当初の予定額を大幅に下回った。

その一方で、四〇〇世帯以上の農家に対するアンケート調査は予想以上に大変で、地元農家の聞き取りにくい方言や質問のやり取りに苦しんだり、疲労で体調を崩す大学院生が出てくるなど、トラブルも相次いだ。そのため、問題が発生するたびに、南京農業大学の教員や大学院生と情報共有を図ったり、改善策を夜遅くまで協議したりした結果、調査の後半からは農家へのアンケートも順調に進み、調査も無事に完了することとなった。

●「包」で繋がる中国人

この「人に任せる」という考え方は、中国人の伝統的な倫理規律である「包」(請負)と関連しているかもしれない。「包」とは、「人と人との間の取引的営みの不確実性を、第三の人をその間に入れて請け負わしめ、確定化しようとする」もので、中国では契約の不完全性を補う

ひとつの手段として機能してきた。たとえば、人民公社が解体し、農業生産責任制が導入された際にも、この「包」の思想によって農家への請負が実現できたとも考えられ、一九八〇年代前半の農業生産性の向上にも大きく貢献している。

もちろん、中国でも市場経済化の進展に伴い、国際基準に合致した制度が徐々に整備されつつあり、「包」のような曖昧な契約から脱却し、より透明性の高いものに移行する動きもみられる。しかしながら、人と人との関係のなかで、信頼のおける人にすべてを託すといった姿勢が農村調査のみならず、中国で生活していくためにも依然として有用と思われる。

この「包」で繋がった人との縁を大事にしつつ、「わかっていないことは、わからないことだけ」という言葉を道標に、今日もまた、研究という名の道を愚直に歩み続ける。

《参考文献》

加藤弘之「移行期中国の経済制度と『包』の倫理規律」中兼和津次編『歴史的視野からみた現代中国経済』ミネルヴァ書房、二〇一〇年。